

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）	1
1. 人文学部、人文科学研究科	3
2. 人間発達科学部、人間発達科学研究科	6
3. 経済学部、経済学研究科	8
4. 医学部	10
5. 薬学部	12
6. 医学薬学研究部	14
7. 理学部	17
8. 工学部	19
9. 都市デザイン学部	22
10. 理工学研究部	25
11. 芸術文化学部、芸術文化学研究科	28
12. 教職実践開発研究科	30
13. 和漢医薬学総合研究所	32

注) 現況分析結果の「優れた点」及び「特色ある点」の記載は、必要最小限の書式等の統一を除き、法人から提出された現況調査表の記載を抽出したものです。

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）

学部・研究科等	研究活動の状況		研究成果の状況	
	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
人文学部、人文科学研究科	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
人間発達科学部、人間発達科学研究科	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
経済学部、経済学研究科	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
医学部	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
薬学部	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
医学薬学研究部	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
理学部	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
工学部	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
都市デザイン学部	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
理工学研究部	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
芸術文化学部、芸術文化科学研究科	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
教職実践開発研究科	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある
和漢医薬学総合研究所	【2】	相応の質にある	【2】	相応の質にある

1. 人文学部、人文科学研究科

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 …………… 4)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 …………… 5)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔優れた点〕

- 第3期中期目標期間は、著書・論文の数を維持しながら質を向上させることを目標とした。これに伴い、教員業績評価方法についても、平成30年度分から、研究業績をより重視し、査読付き雑誌掲載論文を高く評価する方針に転換した。

これにより、教員一人当たりの著書・論文数は第2期中期目標期間の1.8件／年から平成28年度から令和元年度は2.15件／年となったほか、査読付き論文数については、平成28年度から令和元年度にかけて教員数が10%減少したにも関わらず、同数（17件）となっている。

〔特色ある点〕

- 「人文知」コレギウムにおいて、第1回（平成29年6月）には社会学と人文地理学、第5回（平成30年1月）には文化人類学と日本語学を専門とする教員が、それぞれ富山県に関する研究報告を行った。

なお、「人文知」コレギウムでの研究報告は、「人文知のカレイドスコープ—富山大学人文学部叢書」として、平成29年度から毎年出版している。これにより、富山県に関する研究を含めた人文学部教員の研究内容の学内外への可視化と研究成果の社会への還元を図っている。

- 富山大学中央図書館において、ラフカディオ・ハーンの蔵書コレクションである「ヘルン文庫」を所蔵していることから、人文学部教員が中心となって「富山大学ヘルン（小泉八雲）研究会」を設立し、平成28年から毎年シンポジウムを開催し、ラフカディオ・ハーンに関する研究成果を発表している。

同研究会の研究により、富山大学学長裁量経費（平成27年度～平成30年度）及び科研費（挑戦的萌芽研究、平成28年度～平成29年度）の採択を受けている。

- 学部教員が開催するシンポジウムの経費支援等の結果、海外の機関に所属する研究者との共同研究数は平成28年度の21件から、平成30年度、令和元年度にはそれぞれ34件、30件へと増加した。相手先は、中国・韓国・ベトナムの東アジア圏だけでなく、アメリカ合衆国・カナダ・ドイツ・フランス等の欧米諸

国にも及んでいる。

- 人文学部が主催等となっている会議・シンポジウム・ワークショップの件数は、平成 28 年度、平成 29 年度の各 15 件から、平成 30 年度は 29 件、令和元年度は 33 件に増加した。

また、国内の学会・大会組織運営を担う学会理事・委員・雑誌編集委員への就任数は、平成 28 年度の 25 件から毎年度増加し、令和元年度は 33 件となっている。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績が、2 件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

2. 人間発達科学部、人間発達科学研究科

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 …………… 7)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 …………… 7)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔優れた点〕

- 国際的な連携による研究活動を推進するため、3名の外国人客員研究員の受け入れを行った。このうち2名は、情報通信研究機構海外研究者個別招へい制度によるものとなっている。また、国際連携推進のための外部資金への応募も積極的に行っており、これらの取組により、第3期中期目標期間中に合計6報の論文がインパクトファクター付き国際ジャーナル誌に掲載されている。

〔特色ある点〕

- 国外の研究機関を訪問しての学術研究調査・共同研究を実施しており、平成28年度に大学間交流協定を締結した国立台湾中央大学の研究者との共同研究成果として、米国地球物理学会の JOURNAL OF GEOPHYSICAL RESEARCH 誌に論文2報が掲載された。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に優れている研究業績、社会・経済・文化的に優れている研究業績があり、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

3. 経済学部、経済学研究科

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 9)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 9)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔特色ある点〕

- 北陸地域の研究者の交流、研究シーズの発掘、共同研究の推進、研究成果の社会への還元を目的とした北陸地域政策研究フォーラムを北陸地区で開催している。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績が、1件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

4. 医学部

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 11)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 11)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況**〔判定〕 相応の質にある****〔判断理由〕**

研究活動の基本的な質を実現している。

〔特色ある点〕

○ 平成 28 年度から令和元年度にかけて、富山県厚生部が実施した「認知症高齢者実態調査（平成 26 年度）」の追加分析を行い、今後の認知症対策を検討する上での重要な知見を明らかにした。また、平成 29 年度から令和元年度にかけて、富山県教育委員会との連携事業として実施した文部科学省「スーパー食育スクール事業（平成 26 年度）」の追跡調査を行い、子供の長時間メディア利用の決定要因や食育等についての調査結果を医学雑誌やメディアを通じて公表する等、様々な取組により研究成果を社会に還元している。

また、県内医療機関と連携して、健診データ（ビッグデータ）を基にした疾病等に関する分析、富山市内の歯科医院、日本小児歯科学会等と協働し「小児歯科疫学の全国調査」を基にした歯科疾患の都道府県格差、生活習慣との関連等についての調査・分析を行うなど、自治体や市中病院と協働した地域医療支援、地域保健支援に係る研究活動に取り組んでいる。

○ 平成 30 年 3 月に、病理診断学講座を中心として、富山県で発生した四大公害病の一つであるイタイイタイ病に関する医学的に貴重な資料を、重金属障害の病態解明を探求している国内外の研究者が活用できるよう「イタイイタイ病資料室」を開設した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況**〔判定〕 相応の質にある****〔判断理由〕**

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、9 件、2 件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

5. 薬学部

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 13)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 13)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況**〔判定〕 相応の質にある****〔判断理由〕**

研究活動の基本的な質を実現している。

〔特色ある点〕

- 日本学術振興会研究拠点形成事業（採択期間：平成 28 年度～平成 30 年度）等により、新たな創薬資源を活用する研究拠点として、富山とアジア・アフリカ地域の創薬研究ネットワーク（Toyama-Asia-Africa Pharmaceutical Network（以下「TAA-PharmNet」という。））を構築した。TAA-PharmNetにおいては、大学の研究実績を基に、先進科学技術を用いて、アジア・アフリカ地域の伝統・天然薬物資源から新規天然化合物を発掘し、神経疾患、難治性疾患、生活習慣病等や熱帯・亜熱帯地域特有の疾病の治療のための新規医薬品の創製を目指した共同研究を実施している。
- 平成 27 年度に大学の製剤設計技術に関する先端研究の推進及び地元製薬企業との実用化に向けた各種共同研究の実施により、県内の製薬企業の製剤技術発展に広く貢献するため、寄附講座「製剤設計学講座（客員教授 1 名、客員助教 1 名）」を設置した。
- 「くすりの富山」として知られる地域の活性化と国民福祉の向上に貢献することを目的とする「創薬・薬業」分野の研究会として、「フォーラム富山「創薬」」を実施している。第 3 期中期目標期間に計 8 回開催し、産学の研究者が活発に意見交換、情報交換を行った。また、第 45 回（平成 29 年 5 月）、第 49 回（令和元年 5 月）研究会では、薬学部教員がコーディネーターを務めた。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況**〔判定〕 相応の質にある****〔判断理由〕**

学術的に卓越している研究業績が、1 件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

6. 医学薬学研究部

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 15)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 16)

分析項目 I 研究活動の状況**〔判定〕 相応の質にある****〔判断理由〕**

研究活動の基本的な質を実現している。

〔優れた点〕

- 日本学術振興会研究拠点形成事業（採択期間：平成 28 年度～平成 30 年度）等により、新たな創薬資源を活用する研究拠点として、富山とアジア・アフリカ地域の創薬研究ネットワーク（Toyama-Asia-Africa Pharmaceutical Network（以下「TAA-PharmNet」という。））を構築した。TAA-PharmNet においては、大学の研究実績を基に、先進科学技術を用いて、アジア・アフリカ地域の伝統・天然薬物資源から新規天然化合物を発掘し、神経疾患、難治性疾患、生活習慣病や熱帯・亜熱帯地域特有の疾病等の治療のための新規医薬品の創製を目指した共同研究を実施している。

- 第 3 期中期目標期間の重点研究課題として取り組んでいる研究プロジェクト「医薬学と複雑系数理学からの挑戦『未病』の解明、そして新たな医療体系の構築と地域との連携による健康人口の増加（未病プロジェクト）」の研究グループによる研究成果の一つが令和元年 6 月に国際誌に発表された。本プロジェクトは医学薬学研究部、附属病院及び和漢医薬学総合研究所に加え、工学部、人間発達科学部との連携による複雑系数理学の導入により、東洋医学における概念の「未病」を科学的に立証したものとなっている。

さらに、地方自治体と協力し、加齢性疾患や生活習慣病等に関して「未病」の段階での生活指導や概日リズムを考慮して最適化した和漢薬等の療法を実践し、発病を減少させることにより、健康人口や労働人口の増加、医療費の削減に寄与し、今後、従来医療の枠組みを超えた未病に対する先制医療戦略の構築が期待されている。

〔特色ある点〕

- 第 3 期中期目標期間の重点研究課題として取り組んでいる研究プロジェクト「世界トップレベルの脳科学研究拠点の構築」に関して、中心研究者である本研究部 井ノ口 馨教授の科研費特別推進研究の採択を受け、国際的高水準の脳科学研究を推進する最先端研究拠点として、令和元年度に「アイドリング脳科学研究センター」の設置（令和 2 年 4 月）を決定した。
- 附属病院臨床研究管理センターにおいて、臨床研究の立ち上げから実施まで

の支援のための研究支援依頼窓口を設置し、臨床研究に対するモニタリング・監査の体制整備を行っている。

これにより医学薬学研究部で実施する臨床研究についても、研究倫理の観点から適正でかつ学術的に質の高い内容となり、これらの研究に基づく情報発信を通じた社会貢献への支援の強化がはかられた。

- 日本学術振興会大学の世界展開力強化事業「キャンパス・アジア」中核拠点支援・平成 22 年度採択事業（旧：日中韓等の大学間交流を通じた高度専門職業人育成事業 平成 27 年度終了）の事後評価において、大学がS評価を受けた「和漢薬領域を基盤とした高度職業人育成事業」について、事業終了後も引き続き高度職業人育成コースを設置している。コース受講者が在籍していた平成 28 年度には、県内製薬企業関係者、病院関係者及び大学関係者によるインターンシップ実習報告会を実施した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、9件、2件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

7. 理学部

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 18)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 18)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、4件、1件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

8. 工学部

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 20)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 21)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔優れた点〕

- 科学技術振興機構未来社会創造事業探索加速型「地球規模課題である低炭素社会の実現」領域の研究開発課題「二酸化炭素からの新しいGas-to-Liquid触媒技術」において開発した、航空機ジェット燃料を直接合成できるオンデマンド触媒により、バイオマスからジェット燃料を製造するプラントが民間企業の工場で稼働している。現在第二ステージとして拡張され、航空機民間企業に提供される予定となっている。

〔特色ある点〕

- チュラロンコン大学（タイ王国）、タイ石油公社らと共に、タイ王国サラブリー郡でバイオ軽油、ガソリン、アルコール燃料を製造するプラントを建設、稼働している。チュラロンコン大学は現地のプラント用地整備及び副生成物の処理施設の増設並びにプラント運転要員の一部提供を行っており、タイ石油公社は運転の補助、生産製品の品質評価管理、将来の実用化及び同社のガソリンスタンドでの販売を行っている。富山大学を含めた日本側からは、バイオマスガス化プラントの導入、現地工場設備のエンジニアリング、全工場の運転及び運転ノウハウ、運転指導要員提供と研修提供、全工場のメンテナンスと安全管理、触媒の製造と提供、現地スタッフの育成などを行っている。さらに、本事業の人材育成のため、チュラロンコン大学の留学生、タイ石油公社からの研修生を工学部が受け入れるとともに、富山大学大学院理工学教育部生を運転指導要員として派遣している。
- 工学部独自に開発した、抗体取得技術（免役された個体から抗原特異的な抗体産生単一細胞を確実に単離し、そこから抗体遺伝子を取り出し発現させることで、わずか5日間で目的の抗体を取得できる世界最速レベルの技術）を開発し、製薬会社等に向けてライセンス化した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、5件、4件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

9. 都市デザイン学部

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 23)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 24)

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔特色ある点〕

- 学部の研究目的である、SDGs 推進による地域循環共生圏の形成を担うことに関して、平成 30 年度に SDGs 未来都市に選定された富山市における「富山市 SDGs 未来都市計画～コンパクトシティ戦略による持続可能な付加価値創造都市の実現～」に関連した富山大学の取組「地域再生可能エネルギー導入による地産地消促進及び ESD 推進」について、都市デザイン学部が主体となって実施している。

「エネルギーマネジメントに関する調査」、「ESG 投資活用に関するポテンシャル調査」、「ESD の推進」の 3 テーマについて、工学部や経済学部等と連携して調査研究を実施しており、令和元年度には、環境省ローカル SDGs（地域循環共生圏づくりプラットフォーム）の活動団体として、国立大学法人として唯一選定された。

- 共同研究のうち、富山県内企業との実施件数は平均で 30% 超となっており、地域産業と密接に関連した地域貢献に資する研究活動を行っている。内容についても、企業誘致に向け、富山が事業継続計画（BCP）拠点として優れた地域であることを定量的に示す手法開発の研究や、新材料（コンクリートの撥水材など）や新形式道路橋構造（メタルロードなど）に関する共同研究によるトンネルや橋梁コンクリート床版の長寿命化の効果的かつ経済的な実施に関する実証研究等、都市デザイン学部の研究目的に沿った多岐にわたる分野において連携を図っている。
- ノルウェー王国の諸機関と連携して、アルミニウム合金の分野における教育・研究共同プロジェクト（Norwegian-Japanese Aluminum alloy Research and Education Collaboration Phase-2（INTPART-2））を実施している。プロジェクトは、両国の大学・研究機関と企業が協力し、教育・研究・ビジネス（ナレッジトライアングル）の連携を推進することを目的とし、平成 28 年から平成 29 年に実施されたプロジェクトをさらに発展させた取組で、ノルウェーリサーチカウンスル（Research Council of Norway）の支援のもとで実施しており、プロジェクトリーダーのノルウェー科学技術大学（NTNU）、日本側の代表である都市デザイン学部のほか、東京工業大学、九州大学、ノルウェー産業技術科学研

研究所（SINTEF）、Hydro Aluminum、日本アルミニウム協会、富山県アルミ産業協会
会で構成されている。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績が、2件との評価を受けており、現況分析単位の
目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

10. 理工学研究部

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 26)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 27)

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔優れた点〕

- 科学技術振興機構及び国際協力機構が共同で実施している、地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム (SATREPS) の環境・エネルギー (低炭素社会) において、「バイオマス・廃棄物資源のスーパークリーンバイオ燃料への触媒転換技術の開発」が採択されている。

5億円 (平成 28 年度から令和 3 年度) の予算規模で、バイオマス資源を液体燃料へ転換するガス化・触媒技術を開発、社会実装を目指す研究で、民間企業等と共同で、タイ王国サラブリー郡において、バイオマスから軽油、ガソリン、アルコール燃料を製造するプラントを建設、稼働している。

なお、本工業生産方法は著名誌である ChemCatChem、ACS Catalysis に掲載され、科学技術振興機構、国際協力機構、環境省のホームページでも公表された。

- 独自に開発した抗体取得技術 (免役された個体から抗原特異的な抗体産生単一細胞を確実に単離し、そこから抗体遺伝子を取り出し発現させることで、わずか 5 日間で目的の抗体を取得できる世界最速レベルの技術) について、製薬会社等に向けてライセンス化した。

この技術を用いて国内大手製薬企業で取得された抗体が、抗体医薬品開発候補としてヒトを対象とする第一相試験へ進むこととなった。

〔特色ある点〕

- 国内外の新たな都市と交通の在り方に関する技術的・学術的な研究として、科学技術振興機構 (JST) 戦略的創造研究推進事業 (CREST) において、「自然災害領域等における CyborgCrowd ミドルウェア要件分析と応用」についての分担研究を行っている。災害現場における被害状況把握を対象とした実学研究により、令和元年度には、平成 30 年西日本豪雨災害の倉敷市真備町の被災領域を特定する実証実験を実施し、約 4 時間弱で把握できたという実績を上げた。
- アルミニウムをはじめとした軽金属材料に関する研究として、高分解能 TEM によるナノスケール界面構造解析を行っている。平成 31 年度までの科学技術振興機構研究成果展開事業 (産学共創基礎基盤研究プログラム) において実施した研究において、これまで解明されていなかった高強度アルミニウム合金の水素

に対する脆化機構を世界で初めて解明したものについて、令和元年度からはCREST 事業の採択を受け、実施している。

- アルミニウムに関する研究の発展及び熊本大学先進マグネシウム国際研究センターが実施するマグネシウム研究との融合による新たな研究の実施に当たり、学内の新たな研究体制の構築に向けた具体的な検討を行った。その結果、令和2年度から都市デザイン学部附属先端材料研究センターを全学組織化した、研究推進機構先進アルミニウム国際研究センターを設置することが決定している。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、11件、5件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

11. 芸術文化学部、芸術文化学研究科

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 29)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 29)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔優れた点〕

○ 富山大学の研究の高度化と、産業界等に富山大学の研究シーズを紹介し大学への理解を深めてもらうこと等を目的とした「Toyama Academic GALA 2017」において、「芸文×工学連携プロジェクト」が優秀賞を獲得した。

なお、このプロジェクトにより制作した「世界初、電磁浮遊するワインデキャンタ (Carafage)」は、「イノベーション・ジャパン 2019」において、芸術文化研究領域では唯一の展示となった。

○ 工業ならびに工芸分野において特許出願を行っており（特許登録5件、特許出願3件）、特許登録された発明を基に行った企業との共同開発による製品化（1件）を含め2件の製品が発売されている。

〔特色ある点〕

○ 研究成果の地域社会実装化にあたり、富山大学附属病院におけるホスピタルアートの取組の実施に向け、学部内にホスピタルアート WG を設置している。WG においては、他大学の附属病院等における先進事例としての取組について調査を行っており、令和2年度の附属病院でのアート展示の実施に向け、附属病院と検討を進めることとしている。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、1件、1件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

12. 教職実践開発研究科

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 31)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 31)

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

研究活動の基本的な質を実現している。

〔特色ある点〕

- 諸外国においても、小学校におけるプログラミング教育や、小・中・高等学校における主体的・対話的で深い学びに関する研究が進められていることから、グローバルな観点で組織的な研究を進めるため、日本の教職大学院と同じ形態をとるクィーンズ大学 (Queen' s University Belfast) (英国北アイルランド) と連携して、共同で教育・研究を進めている。テレビ会議システムを利用して、年に2回、日英セミナー (Educational Seminar for Teaching and Learning (ESTEL)) を開催しており、双方各10名程度が参加し、発表、議論を行っている。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に優れている研究業績があり、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。

13. 和漢医薬学総合研究所

(分析項目Ⅰ 研究活動の状況 33)

(分析項目Ⅱ 研究成果の状況 34)

分析項目 I 研究活動の状況**〔判定〕 相応の質にある****〔判断理由〕**

研究活動の基本的な質を実現している。

〔優れた点〕

- 若手教員及び女性教員率の維持に向け、キャリアアップの促進及び人材の流動性の向上のために、若手研究者及び女性研究者の積極的採用を行っている。令和元年5月時点の若手研究者比率は19.0%、女性研究者比率は28.6%となっており、大学全体の比率（若手研究者17.4%、女性研究者18.4%）を上回っている。また、外国人研究者比率についても19.0%と大学全体の比率（3.7%）を上回っている。

〔特色ある点〕

- 10年先を見据えた機能強化を目指し、平成29年度に学外有識者を含めた改革推進検討懇談会を開催した。懇談内容を受けて、平成30年度には「研究所の改革・機能強化・発展に向けた学内ワーキンググループ」を設置し、令和2年度の改革実施に向けた検討を開始した。その結果、研究所の新たな目的として、基礎研究の成果を臨床研究に繋げること、植物性医薬品等の開発や漢方方剤の効能拡大を行うことを掲げ、従来の研究部門の他に、「臨床応用部門」、「産官学連携部門」を新たに設置することとした。また、附属教育研究施設として「和漢医薬教育研修センター」を新設した。これにより、次世代に向けた和漢医薬学の基礎・臨床研究の拠点形成に加え、専門人材教育の双方を促進する体制を整備した。
- 第3期中期目標期間の大学独自の重点戦略に「未病の解明」が挙げられたことから、平成29年度に和漢医薬学総合研究所内に「東西医薬学研究センター」を設置した。学内共同研究の推進に向け、医・薬・理・工の各学部及び附属病院の教員23名が兼任で所属し、研究所教員と共同で漢方概念や和漢薬の機能を活用した研究を行った。
- 国際協力拠点（4機関）、部局間交流協定締結機関（16機関）及び科学技術振興機構（JST）さくらサイエンスプランなどを活用したアジア諸国の大学から、伝統医薬学研究・天然薬物研究を行う学生、研究者について受け入れを行っている。平成28年度から令和元年度に受け入れた外国人学生・研究者は延べ212名となっている。

- 学外の学識経験者（学会推薦者等）、他部局の教員及び研究所教員により構成される「運営協議会」を毎年開催し、研究所の運営、活動、共同研究の実施状況に関して意見を伺うとともに、研究所改革などに関して協議を行った。令和元年度には同協議会による外部評価を実施し、評価の内容を今後の活動に活かすこととしている。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 相応の質にある

〔判断理由〕

学術的に卓越している研究業績、社会・経済・文化的に卓越している研究業績が、それぞれ、1件、1件との評価を受けており、現況分析単位の目的・規模等を勘案し、相応の質にあると判断した。